

テアトロ

3
2019

● 2018年・劇評家19氏による

舞台ベストワン・ ワーストワン

批評のエッセイ 渡辺 淳/山形治江

●連載 共創する空間へ② 西堂行人

●新連載 ⑥台湾編 流山児 祥

●レポート● 岡本 章/上田美佐子

今月選んだベストスリー 296 渡辺 保

社告/第31回テアトロ新人戯曲賞
第二次及び最終審査候補作品発表!

◆戯曲◆

血と骨

原作・梁石日

脚本・江原吉博





「ギリシヤ悲劇」上演の新たな可能性

山形治江

昨年末、ギリシヤ悲劇上演の新たな可能性を示す二つの舞台を見た。いずれも現代的な演出だが、一つは主人公の性格を、もう一つは作者の意図を、もしかすると初演以上に効果的に表現したのではないかと思わせる秀作だった。両者はその他にも今後の上演のヒントとなる点が多かったので、以下にまとめてみたい。

清流劇場「MEDEAメデア」(田中孝弥演出・丹下和彦訳)

メデアとイアソンは駆け落ち結婚し、二人の子をもうける。だがイアソ

ンは妻を裏切り土地の王女と結婚する。メデアは彼の新妻とその父、自らの子を殺して復讐し、竜車で飛び去る。現代的に言えば「夫の不倫で起こった復讐殺人事件」だが、実際に現代的に演出しようとするとき意外にむずかしい。神話的要素が時間的整合性を阻むからだ。特に最後の場面は「空飛ぶ竜車」の出現もさることながら、それを「私の祖父、太陽の神からの贈り物」と平坦と語るメデアの非現実的な台詞が、リアリズム演出を一举に崩壊させる。古代劇を見に来た観客に現代的設定をどう納得させるか。神話性と古代劇の

上演様式をどう処理するか。これらの点から田中演出を考える。舞台の最初の印象はほぼイプセン劇だった。ワンフロアに配置されたダイニングキッチンとリビングでメデアは家事に専念している。ホットケーキを焼き、ココロをかけ、掃除クリナーを噴霧し、客に紅茶を入れる。子供たちはおやつを食べTVゲームで遊び、イアソンは冷蔵庫からツマミを出しラップをかけてレンジで温め、ビールを飲みながら結婚の言い訳をする。ギリシヤ悲劇の台本には飲食を示唆する場面はない。舞台上で飲食する演出は

古代劇にリアルな日常性を与え、神話物語をごく自然に現代に溶け込ませた。

以上に印象づけた。

スマホの使い方も絶妙だった。夫婦の主張が噛み合わず険悪な空気が漂う中、イアソンはスマホに眼を走らせる。目ざといメデアは新妻からのメールだと察知する。「新しい奥様のところに帰りたくてむずむずしているのに長居をさせて悪かったわね」。二四〇〇年前の台詞が見事にはまった。イアソンが去った後、もはや関係修復は不可能と悟ったメデアは、敵の毒殺計画を実行するため、改めてイアソンを家に招く。警戒するイアソンは、来るなり録音設定にしたスマホをかざす。発言内容は証拠になるぞという無言の脅しだが、メデアは動じない。わざとスマホに向かって夫の意見の正しさを認める言葉を語ってみせる。録音は彼女にとっても都合。自らの言葉で敵を油断させ、贈り物を受け取らせることができるからだ。スマホは、現代の夫婦関係を写す道具として機能し、かつメデアの知略レベルの高さを原作

現代化に鮮やかな手腕を見せた田中は、非リアルな要素にも大胆な演出を施す。子供に巨大な仮面(装飾用として現存する古代面の模写)をつけさせ、イプセンの近代劇に視覚的違和感を持ち込んだ。面は最後、殺した子供の首に見立ててメデアが持ち去る。古代の上演様式を時代考証まで踏まえて取り込んだ見事な趣向だったが、子殺し直前の愁嘆場では面が邪魔でメデアは子を抱きしめることができず、見る側もその不自然さに気を取られ憐憫すら忘れた。そのため肝心の「子殺し」の衝撃が薄れてしまった。四人のクロス(うち二人は面を外した子役)も、リアルな日常風景の中では奇妙さが残った。中流家庭の一室に突如闖入する彼女らは、メデアと他の登場人物が対話する時は姿を消すが、終わると出てきてしたり顔でモノを言う。この「盗み聞き」スタイルはクロス立場が不明確なため、存在意義に疑問がわいた。

最後の場面。イアソンは子を殺したメデアを罵り呪う。「おまえは獅子だ」「復讐神と正義の女神がおまえを滅ぼし給わんことを」。原文の語感に激しいが、俳優はこれを咬いた。悄然と座りこんだ彼はすでに戦意喪失状態。メデアがわざわざ竜車で彼の手の届かない位置に飛ぶ必要もない。だから傍らに立ち、話し終わると普通に階段を上って去る。実に合理的な処理だが、神話的表現と現実の肉体が乖離してしまった。神話の言葉を語るにはそれにふさわしい身体が必要だ。イアソンは元「英雄」の、メデアは「半神」的な、常人に見えてどこか違和感のある佇まいが言葉にリアリティを与えるのではないか。現代劇のリアリズムを超越する、あるいは内包する非日常的な瞬間が見たかった。